

昔むかし、天には月はなく、太陽しかありませんでした。

太陽が昇ると、世界はひたすら明るくなり、太陽が沈むと、世界はまっくらになりました。明るくなれば、あたりはまぶしい光ばかりで、人びとは安心して眠ることができません。暗くなれば、どこもかしこもまっくらで、手をのばしても五本の指も見えないので、人びとは仕事ができませんでした。

あるところに、ひとりのかしこい男がいました。ある日、男は考えました。

「太陽をふたつに割れば、うまく昼と夜がわかれるのではないか」

男は、この考えを村の人たちに話しました。みんなは、

「それは、理にかなっている。若い者に、太陽を割りに行かせよう」といって、若者を三人選びました。三人は、どんなことがあろうともかならず任務を果たすという決意をしめすために、それぞれ、生まれたばかりの自分の赤ん坊を背負って行きました。

三人は、帰って来たときに道に迷わないよう、みかんの種をまきながら歩いて行きました。太陽の昇るほうへと、歩きに歩きました。どれほど歩いても、太陽には行きつきませんでした。

一年、また一年と時は過ぎてゆき、三人の髪の毛は真つ白になりました。それでも、うまずたゆまず歩きつづけました。そのうち、三人が背負っていた赤ん坊は、若者になりました。そして、父親たちの後について歩きました。とうとう、父親たちは、よぼよぼのおじいさんになって、道のとちゅうで、つぎつぎにたおれました。

若者たちは、父親たちをお墓に葬って、また太陽に向かって歩きつづけました。

とうとう、若者たちは、太陽が出入りする山のそばまでやって来ました。そこは、生きていられないほどの暑さでした。三人は、服をぜんぶ脱ぎすてましたが、それでも、せなかにびっしり汗をかきました。

若者たちは、山かげに身をひそめて待ちました。そして、太陽が向かいの山のとっぺんから顔を出したとき、いっせいに、ねらいを定めて矢を射かけました。三本のするどい矢は、同時に太陽ののどにつきさりました。太陽の血がほとばしりました。血は、地面にふりそそぎ、若者たちの体にもかかりました。一番前に立っていた若者は、あつというまに熱さで死んでしまいました。あとのふたりもやけどを負って、村に向かって

逃げました。

帰り道、父親たちがまいたみかんの種は、もう太い木に育ち、黄色いみかんが枝もたわわに実っていました。ふたりの若者は、みかんを食べて飢えとかわきをしのぎました。

村に帰り着いたとき、ふたりは、腰が曲がり、つえをついた、白髪の老人になっていました。村の人たちは、大よろこびでふたりをむかえました。

「あなたが、太陽を射てくれたおかげで、一日はうまく昼と夜に別れました」

それからというもの、昼間は太陽が昇り、夜は太陽に代わって月が出るようになりました。

おしまい

村上郁再話

資料『太陽と月と星の民話』日本民話の会・外国民話研究会／三弥井書店